

嶋田智明・大峯三郎(編)

「実践 MOOK・理学療法プラクティス
これだけは知っておきたい
脳卒中の障害・病態と
その理学療法アプローチ」

小野武也

県立広島大学大学院総合学術研究科保健福祉学専攻

理学療法の対象で最も多いのは脳卒中患者である。当然のことながら、多くの新人理学療法士は脳卒中患者を受け持つことになる。新人理学療法士が患者の持つ多様な障害像を理解するためには多くの書籍にあたる必要がある。そこで、本書は「新人の理学療法士が臨床現場に臨むために土台となる知識・技術はなにか?」について徹底して内容を吟味・厳選し、まとめあげられていることが最大の特徴である。そのため、新人理学療法士は、本書を通して効率的に短時間のうちに重要なポイントを学習できる。また、理学療法を実施していくには、経験を踏まえた先輩からのアドバイスが不可欠である。本書は、この点も含めて企画された良書である。

内容は、パート1「脳卒中患者を受け持ったらどうするか」では、「PTが知っておくべき神経画像のみかた〜症状と画像は関連している」、「多様な病態をどう評価するか」、「治療目標と理学療法プログラムの立て方」、「患者との接し方」について、パート2「ICFから見た理学療法介入のポイント」では、「機能障害に対して」、「活動制限・参加制約に対して」、「わたしはこうしている」についてまとめられている。これらは、シンプルで基本的事項を網羅し、さらに全体を通して

実践的マニュアル本ともいえるものである。

各項目は、はじめに重要ポイントが述べられており、理解を助けるために多くの図表が用いられている。図は読者が評価やアプローチの流れをイメージしやすいようにフローチャートで示されており、急性期や慢性期の運動麻痺の評価も明日から臨床で容易に取り組むことができる内容になっている。さらに本文中にはQ & A方式を用い、具体的に解決策を求めたい読者にとっては参考にしやすい構成である。他にも、歩行分析、予後予測、脳卒中の肩の痛み、リスク管理など11項目のミニレクチャーや「advice」「メモ」「POINT」として理解を深める工夫、また「新人理学療法士へひとこと」として経験豊富な理学療法士からの貴重なアドバイスなども記載され、どれを取っても読者には有意義な内容である。各項目の最後には「Further Reading」として重要な文献を挙げ、簡単な説明が紹介されており、もう一步進んで勉強したい読者には有益となる情報が提供されている。

編集は読者の立場に立ち、読みやすさを重視し、内容が理解しやすいように構成されている。文章表現は平易でことさらに難しい表現を避けている点も特筆すべき点である。本文は2色刷りで書かれているが、色の濃淡を変え、要点が視覚的にもわかりやすく強調されている。理解不足を補う本として、また日常診療に必要なエッセンスがまとめられた本として、使用頻度の高い本になると思われる。様々な不安や疑問を持ちながら日々の診療に携わる新人理学療法士には今すぐほしいおすすめの1冊である。

●B5判 180頁(2色刷)

定価 4,725 円(本体 4,500 円+税 5%)

2008 年 文光堂・刊